広報 安達太良

R3.10.15 撮影

【巻頭言】

「何故」の問いかけを

本宮市教育委員会教育長　松井　義孝

最近、「投げたブーメランが戻ってこないことが重なり、忘れた頃に戻ってきたと思ったら、いきなり後頭部にぶつかってきた。」と感じることが多くなってきた。この原因は、私の他者に対しての「伝える力」が弱くなってきているからと考える。いや、元々弱かったことに今頃になって気付いたということか。しかし、校長職として現職の頃は、職員をはじめ他者との意志疎通に困惑したことは殆どなかった。ということは、当時の教頭先生や職員の方は私のことを「この校長だから、仕方あるまい。」と思い、私のことをリードしていてくれたのであろう。これまた、気付くのが遅くなってしまった。子どもたちが楽しく学校生活を過ごせるようにと思って、全職員が私のことを引っ張っていたのであろう。その思いに気付かず、私は学校内外で地域・保護者の方に笑顔よろしく手を振っていたのかもしれない。退職して初めて、私は学校という世界の中で、校長職という肩書きのおかげで温かく守られていたのだと気付いた次第である。

しかし、年とともに口から発する言葉が頭の中で渦巻いて滑らかに出なかったり忘れ方も年単位で速くなったりしている中で、他者への「伝える力」を維持向上していくのは大変な労力を必要とする。ではどうするか？今の私に必要なことは「何故？」という自分自身への問いかけである。

例えば、「何故、各種行事の進行は教頭や教務主任が行うの？若手はただ見ているだけ？」と問えば、「学校では教頭や教務主任が行うのが常識です。それに採用年数が短い先生には負担になると思います。」というような回答になるのだろう。「成る程、そうか。」と思うが、若手を育てたいと思えば、放送の進行を採用２・３年目の先生が行うことは十分可能であるし、行事の流れが否応なく頭にたたき込まれていくのではないか。さらに、進行という役割をもつことで行事運営に発言しやすい状況を生み出すものと考える。一般的に行事活動等は「ずっと前からこうでした。問題ありません。」と言われると「それでいいか。時間もないから早く終わろう。」という気持ちになり、安易に物事が過ぎていってしまい学校（組織）が停滞していく傾向に陥りやすい。その際に危惧されるのは「誰のための行事」だったのかが形骸化し、子どもや保護者たちの存在を忘れた行事等になってしまうことである。

「何故？」を問いかけ、理由や原因を探っていけば、思考・判断の方向性が決まり自分の考え・思いを表す言葉が自ずと出てくる。それを集団（チーム）で話すことでお互いの興味・関心が高まり、今までの見方や視点の当て方が変わってくると考える。思いつきでもいい、自分の発した言葉が周囲の賛同を得て具体化していき目の前に形になっていくときの心地よい疲労感を味わいたいものである。時折、面倒くさいと思うことはあるが仕事は楽しみたいものである。コロナ禍の時代だからこそ更に話し合いの時間が求められるのではないか。

私の投げたブーメランが戻ってこないのは、私自身の考え・思いなどが空っぽだからである。反応しようがないのである。忘れた頃にブーメランが後頭部にぶつかってくるのは「お前は何をしている。しっかりやれ。」という叱咤激励なのだろう。

それぞれの学校が来年度に向けて始動中である。何故から生まれた創造的な活動が生まれてくること、そして、全職員がバントヒットでも構わないから塁に出て子どもたちのために益々大活躍することを楽しみにしたい。なお、校長は犠牲フライをしっかりきちんと打ち、児童生徒・教職員・保護者のためにいい汗をかきたいものである。

【小教研関係全般】

「国語部県大会を終えて」～改めて感じる小教研の存在意義～

福島県小学校教育研究会安達地区会長　安齋　宏之
（本宮市立本宮まゆみ小学校長）

今年度の安達地区会の活動も、新型コロナウイルスの感染拡大により、４月の総会・各部会の開催が中止となる中、各研究部長さんを中心とした役員の皆様のご協力により、夏・秋の研究協議会が開催できましたこと、大変うれしく思います。感染防止を行いながらも、工夫を凝らした研究協議会となり、日々の悩みを共有し、課題解決に向けた足がかりを得ることができたことは、会員が集まったからこその成果です。また、１０月２０日（水）大玉村立玉井小学校・大玉村農村環境改善センターを会場に開催された小教研国語部県大会も、関係する多くの皆様のご努力とご協力により、無事に開催することができ、第Ⅶ期のまとめの発表会としてふさわしい多くの成果を残すことができました。

今年の国語部県大会は、本地区にとっては最初で最後の県大会でした。通常開催地区に指定されると３年間毎年県大会を開催するのですが、令和元年度は台風１９号の災害により急遽中止され、昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大により開催できませんでした。本地区会は、過去２年間の研究を積み重ねてきた成果を発表する場として、なんとしても開催したいとの思いを持ち、国語部長さんを中心に準備を進めてきました。公開授業をお引き受けいただいた玉井小学校の子どもたちの安全・安心を最優先にしながら、あらゆる開催方法を検討してきましたが、感染症の沈静化のタイミングとも重なったおかげで、ほぼ予定通り開催することができたことは幸いでした。午前中は、各地区代表者による研究協議が行われ、研究主題「言葉による見方・考え方を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら、自分の思いや考えを広げ深める指導はどうあればよいか」についての協議を行いました。若手の代表者も多く、自分の実践を熱く語る姿に感銘を受けました。そして、玉井小学校の２つの公開授業。いずれの学級も確かな学級経営を基盤とした学びの集団が形成され、一人一人が叙述をもとに自分の考えを伝え、学び合い、豊かな読みへと高め合う質の高い授業が展開されていました。まさに、国語部の研究主題を具現化した授業だったように思います。午後は、文部科学省教科調査官の大塚健太郎先生よりご講演をいただきました。参加者にとって、満足感の高い研究会となったことはいうまでもありません。国語部長の服部校長先生を始め会員の先生方には、３年間にわたる研究、そして、前日・当日の準備運営等、大変お世話になりました。改めて心から感謝申し上げます。

今年度、小教研の活動に参加する会員の姿を何度か目にする機会に恵まれました。目を輝かせ取り組む姿や会員同士が熱く議論する姿からは、一つでも新たな知識や技術を身に付けたいという意欲が感じられました。それは、様々な課題が山積する中、目の前の子どもを少しでもわかるようにしたい、できるようにしたいという強い思いがあるからこそだと思います。そのような研修の場と機会を提供することが、小教研の使命であることを改めて確認することができました。

次年度から、小教研は第Ⅷ期の研究に入ります。これまでの研究の成果や残された課題をしっかりと引き継ぎ、会員のニーズを受け止めた活動に改善して参りますので、引き続き校長先生方のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

１０／２０　国語部県大会（玉井小）

【特集テーマ】

雑草の生き方に学ぶ

二本松市立杉田小学校　　八巻　博之

子どもの頃、テレビから流れる「腕白でもいい、たくましく育ってほしい」という言葉に、ワイルドな家族だなあと感じていた。「たくましさ」には、荒々しさや強靭さといった肉体的にも精神的にもタフな印象がある。

そのたくましさの一例が雑草だろう。道端の雑草は踏まれても抜かれてもたくましく生きている。それでは、雑草のたくましさとは何か。それは、「雑草＝たくましさ＝強者」という図式とは逆の「雑草＝弱者」にある。弱者だからこそ、種を保存する様々な工夫のもとに、したたか（強か）に過酷な自然界を生き抜いている。どんな植物も、光合成のため、より大きく、高く育ち日光を独占することをめざすだろう。それでは、雑草はどうするか。雑草は、ほかの植物にとっては不利になる環境を選んで生えている。そして、種の保存のために、強い植物との競争を避け、風力や動物・鳥の力を借りる形で、したたかに生き抜いている。このように、あらゆる動植物は、食物連鎖の均衡の中で、自分の特徴を生かすことで自らの種を保存し、繁栄させることにつなげている。

予測不可能で変化の激しい現代を生き抜くためには、子どもたちにも同様のしたたかさが必要になる。したたかには、「ずる賢い」というマイナスイメージがあるが、本来の意味は「粘り強さ」であり、褒め言葉である。雑草のようなしたたかさをもち、自分の個性を伸ばし、それを発揮できる環境で活躍すればいいのだ。それぞれの特長を集団の中でシェアし合うことで、社会に貢献し、相互の幸せに結びつけることができるのだ。

これからの社会では、個々の能力の多様性を尊重するとともに、自他の幸福のために役立てる包摂性が求められる。そのために、「誰一人取り残さない」持続可能な未来社会の創り手となる子どもたちには、個性を伸ばし、「したたかさ」を身につけてほしいと願っている。

【特集テーマ】

自ら動き出し、つながる子どもの育成

二本松市立石井小学校　　遠藤　春光

本校では、令和２年度より「つながれ、ひろがれ、石井のわ」をキャッチフレーズに家庭や地域との連携を重視した道徳教育に取り組んできました。その糸口になったのが、「子どもが実際に生活する家庭や地域との連携なしに、子どもたちの道徳性を養うことは難しいのではないか。」とのご指導でした。

今では道徳の授業に３、４名の保護者が参加し、子どもと一緒に考えたり、意見を交換したりするようになっています。授業に参加した保護者からは次のような感想が寄せられています。

○　子どもの心の成長を感じるとともに、素直な考えにびっくりさせられます。

○　子どもの考えから親自身が気付かされることが多く、親の意見もよく聞いてくれるので良い取組だと思います。

授業以外でも、道徳科で学習したことを家庭で再度話し合い、自学ノートにまとめてくる子どもも見られます。これまでの取組により、頭で分かるだけでなく自分のこととして振り返り、より深く考えるようになってきました。

さらに本年度は、「自ら動く子ども」「つながる子ども」を柱に、主体性や協調性の育成を目標にしています。例えばゲストティーチャーとの授業では、これまで「教えてもらう」という意識だったものから「聞きたい、聞きにいく」という、より能動的な姿を目指しています。

本校の道徳教育を中心に子ども自らが家庭・地域に働きかけ、家族や地域の人々と関わりながら進めてきた学びの広がりが、「主体的・対話的で深い学び」に結び付いています。

【趣味・随想】

地域の歴史と文化を学ぶ

二本松市立川崎小学校　服部　英昭

川崎地区を流れる阿武隈川に「智恵子大橋」が架かっている。この橋は二本松市出身の高村智恵子から命名されたものである。

この智恵子大橋が竣工する平成４年までは、人々の往来は渡し船であった。川崎地区から二本松方面に通学する高校生も渡し船で対岸に渡り、そこからバスに乗っていたそうだ。渡し船が栗の木で作られていたことから「栗舟の渡し」と呼ばれていた。この渡し場がある地区を「川ノ端（はた）」という。上川崎村郷土誌には『人皇 63 代後冷泉天皇の御宇、康平年中(1058 年)、本村川之端、栗舟渡場のあたりにて、紙漉くことの業を創め」と書かれており、約１０００年の歴史がある和紙の産地であることが分かる。昭和１５年の統計では紙漉き戸数２３９戸という記録があり、ほとんどの家が紙漉きを生業としていた。その後、時代の流れとともに紙漉きを行う家も減り、現在、私が知る限りでは１軒だけである。この上川崎和紙の伝統を守ろうと道の駅安達（上り）の「二本松市和紙伝承館」で、現在も和紙の生産が行われている。

本校では、地域の伝統や歴史を知り、郷土を誇りに思う児童を目指し、全学年で「和紙」に関する体験学習を実施している。小学校６年間で、地域の和紙の伝統を学んだ子どもたちが、将来にわたり自分のふるさとに自信をもち、ふるさとを愛する人になってほしいと願っている。

【趣味・随想】

先人の「夢」「大望」「志」に思いめぐらせる

二本松市立小浜小学校　藤原　謙

幼い頃から大河ドラマが好きで、毎年欠かさず観てきた。「豊臣秀吉」「真田幸村」「西郷隆盛」「坂本龍馬」…。その時代、その瞬間を生きた先人が何を考え、何に苦しんで迷い、どう判断したのか…私自身の「夢」や「志」をそこに重ね、自分の生き方に思いをめぐらせてきた。

令和２年４月、小浜小学校長を命ぜられ着任した。ふと、渡辺　謙演じる「伊達政宗」が頭をよぎった。１５８５年、伊達政宗は、奥州覇権の大望を抱いて、小浜の大内氏、二本松の畠山氏と対峙し、小浜城に滞在した。独眼竜と称せられる政宗は、小浜の地から、どのような夢を思い描いたのか、そして、この地を領しながら、会津へ立ち退いた大内定綱はどのような思いをもち、この地を後にしたのか。

この地をめぐって対立した先人たちの思いが、小浜小学校長としての判断や在り方、自覚に連なり、私の目の前の小浜っ子を校長として預かり、成長させていかなければいけない、という使命感を強くした。

秋晴れのある日、小浜城跡に赴き、眼前に広がる光景と紅や黄色に色づく葉々、さわやかな秋風を楽しんだ。この地に立つと心地よさとともに、身が引き締まる感覚を覚えた。校長としての原点、初心を忘れることなく、貫こうという思いを強くして、小浜城址を後にした。

【新会員として】

私たちの合い言葉　本宮小プライド

本宮市立本宮小学校　穐山　俊之

校長室の事務机のデスクマットに「私たちの合い言葉」と題した、教職員の心構えを記したものを挟んでいます。以前お世話になった学校で目にし、気に入って手帳に記した言葉です。

私たちの合い言葉
わたしの右手には　家族がいる
左手には　仲間がいる
両肩には　教え子がいる
心には　誇りがある

着任して８ケ月。本宮小という大変恵まれた環境で、校長をさせていただいていることに感謝すると同時に、「この子どもたちのため、精一杯、校長としての職務を果たさなければならない。これだけ恵まれているのだからなおのこと…。」と気を引き締めているところでもあります。

４月の職員会議のなかで私は、「教職員の和と学校への信頼を基盤とし、組織体として、教育目標の達成に努める学校を目指したい。」と、先生方に話しました。そして、そのカギとなるのは「同僚性」であり、「協力的な保護者・地域に対する感謝の気持ち」であり、「伝統ある本宮小に勤めているという誇り（プライド)」であるということも。

本校は今年で１４８年目。これまでに３２代の校長先生が勤められました。そのことを思うたびに「歴代の校長先生方も『校長として、今、何ができるか、何をすべきか・・・。』と考えておられたのだろうか。」と、今の自分と重ね合わせて想像し、伝統と責任の重さを感じています。

「子どもたちも、先生方も、学校へ行くのが楽しいと思える学校にしたい。」まだまだ“思い”ばかりが先行して、そのための具体的な戦略がないのを反省しつつ、理想の学校に少しでも近づけるよう、日々努力しているところです。

各校の校長先生方、市村教育委員会の皆様、県北教育事務所の先生方には、引き続き、たくさんのご教示をいただきたいと願っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

【新任校長として】

「設立の基本理念」を胸に

二本松市立東和小学校　鈴木　浩記

本校は、平成２２年４月に東和地区の７つの小学校が統合して開校されてから、今年で１２年目を迎えます。開校時には３３４名いた児童も現在は２０７名となりました。

さて、本校の教育計画の冒頭には「東和小学校設立の基本理念と経過」が掲載されています。

（前段省略）
一、自然環境に恵まれた、豊かな創造性を育む学校
二、優れた学習環境（環境教育、情操教育、少人数学習に対応できる施設）を整えた夢のある学校
三、中学校との連携が実現できる学校
四、地域コミュニケーションの拠点としての学校
本校で学習し巣立っていく児童にとって、心に残る思い出多い学校となるよう心から願うものである。

このことの意味を改めて問い直してみたとき、校長としてどのような学校経営をすべきかが見えてくるように思います。

学校が地域の宝である子どもたちと地域の人材や思いをつなぎ、文字どおり「地域コミュニケーションの拠点」としての役割を果たしながら、地域とともに子どもたちの成長を支え、見守っていくことが大切です。

校長として地域と積極的にかかわるとともに、恵まれた環境を最大限に生かし、教職員が一丸となって教育目標の具現に邁進したいと思います。

最後になりましたが、４月から新任校長として安達支会の一員に加えさせていただきました。安達支会の校長先生方には、日頃より暖かいお声かけをいただき心より感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

【新任校長として】

届けよう　輝く笑顔を　今だからこそ

本宮市立糠沢小学校　深谷　麻紀

新任校長として糠沢小学校に赴任して早半年が経過しました。初めてのことに戸惑うこともありましたが、安達支会の校長先生方のご助言をいただききながら、今できることに全力で取り組んでいます。

先日、ある児童の保護者と話をする機会がありました。その児童は自分から発言することは少ない児童です。その児童が、家に帰って

「校長先生が、『努力は必ず報われる』って話をしていたよ。」

と話していたことを教えてくださったのです。

実は、全校集会の折に、水泳の池江璃花子さんの話をしました。子どもたちには難しいかな、と思いながら話をしたのですが、児童にはしっかり届いていたようです。嬉しいのと同時に、校長としての責任の重さを痛感した瞬間でした。私の言葉は、校長の言葉として子どもたちの心に残るとともに、保護者や地域の皆様にも伝わっていくということを改めて感じたからです。校長としての責務を果たすためにも、自分の言動に責任をもち、糠沢小に関わる皆様にしっかり届けたいと思った出来事でした。

今年は２年ぶりに学習発表会が行われました。子どもたちが決めたスローガン「届けよう　輝く笑顔　今だからこそ」のもと、糠沢っ子の思いを届けることができた学習発表会だったと思います。

これからも、今だからこそできることを、子どもたちの笑顔とともに、届けていきたいと思います。

今後とも校長会の皆様からのご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

【新任校長として】

力まずに　しなやかに

本宮市立和田小学校　佐藤　憲博

どんな未来であろうと

安達には、３０代後半にお世話になり、当時の校長先生、教頭先生に仕事の仕方を教わりました。これからは、力不足ながら恩返ししようと考えています。

上の写真は、校庭を校舎側から撮りました。和田小は高台に有り、北側には安達太良を背景に新幹線が通り抜けるすばらしい立地です。また、校庭側は広い空に向かって、テイクオフするような気持ちにさせてくれます。６４名の児童は、素直でまじめに学習に取り組んでいます。本校は、昨年度、新型コロナウイルス感染症による運動制限中もボール投げに力を入れた結果、平均値を伸ばすことができました。今年はキャッチボール１０回連続成功など、運動の基本技能を高めたいと考え、昼休みに子どもたちを誘っています。

「小学校時報」「致知」等、学校や企業の取組に触れると、「組織力の向上」「人材育成」に刺激を受けます。その核心はリーダーの言葉であると思いました。校長として、どんな言葉で方向性をそろえ、協働していくか。実行力が問われる責任を痛感しています。日本を代表する舞台俳優が言っていました。

「演技に力を入れすぎると観客が引いてしまう。力を抜くことで、座り方が前のめりになってくる。しかし、出せる力が十分無いといけない。」

研修を怠らず、前のめりにならずの構えでいきます。

白沢地区のコミュニティスクールも次年度から始まります。この機会を生かして、学校課題を克服するための努力の継続、地域・保護者との協働、そして教育活動の発信などを通して、「心身共に健康で、子どもと職員がともに成長する学校」をめざします。校長会の皆様、どうぞよろしくお願いします。